# 編集委員会便り

本年はエネルギー・資源学会の創立15周年の節目にあたる．15年を経て本誌が“エネルギー，資源に関する諸問題を総合的に解決するために，産・学・官一体となって科学技術の振興を促進する”という発行目的にどのように役立ってきたか，会員諸氏並びに世間の評価について編集委員会としては最も知りたいところである．

本誌『エネルギー・資源』の評判は会員の間だけでなく非会員の人の意見も含めて概して良いようである．年間にしてわずか数度であるが学会，委員会等で本誌が話題に昇ることがあり，なかでも特集の企画・内容が好評である．内外の雑誌の保管場所を確保するのに窮している人が多い昨今，このような話題に昇ること自体はまさに希有というべきである．利用のされ方もホットな話題の情報源として，あるいは研究のレビューとして，あるいは研究を業務としている人の研究展開の参考資料等さまざまであるが，ハイライトは本誌の内容が問題解決のヒントになったり，新しい研究を始める動機になっている事例もあることである．

過去15年間に掲載された“記事・論文を項目別にまとめた資料”が編集委員会の席で配布され，これを参考にして特集号の企画を議論することが多い．この資料は事務局が整理した非公式なものでもちろん非売品であるが一部の専門家，識者等の間で貴重な資料として利用されているらしく，あらためて見ると15年にわたる内外のエネルギーにかかる研究がすべて網羅されているだけでなく，研究の流れ，社会の動向等がコンパクトに纏められている．たとえば太陽エネルギー利用のような特定の研究課題がたどってきた変遷であるとかそれ以外のエネルギー研究の中の代表的な研究課題の消長等いろいろな側面から分析し，統計処理すると興味深い結果が期待できそうである．毎号の編集がエネルギー・資源の研究活動の歴史を刻むひとこまであると同時に会員の研究を支える糧にもなっていることを知って，その責任の重さをあらためて感じている．

最近の5年間は地球環境問題とか資源リサイクル等の記事が急増しているのは本学会の活動そのものが質的に変化していることを反映している結果であろう．本学会の諸活動が他の学会に先駆けて地球環境問題を視野にいれ，重心を環境問題に傾斜してきたのは学会としての先見性によるもので，多くの会員の支持を得ている．本学会内にも学会名称を「エネルギー・資源・環境」のように「環境」の旗色を鮮明にすべきとの意見も多いがやや冗長すぎて妙案がなく，本誌表紙に ―環境との調和を目指して― というサブタイトルが付記されているのはエネルギー研究変遷の証しでもある．

本号ではいままで特集としてあまり採り上げられなかった熱電変換に焦点をあて，エネルギー基幹技術としての可能性を探ることを目的とした．熱電変換の最近の研究展開は規模，質の面において日本が世界の指導的な役割を果たしている分野でもある．

5年，10年後の熱電変換技術の姿が楽しみでもあり，不安でもある．

越 後 亮 三
（東京工業大学工学部教授）